

クロード・モネ

## 睡蓮

1907年

油彩／カンヴァス

92.5 × 73.5 cm

DIC川村記念美術館蔵

Claude Monet

## *Nymphéas*

1907

Kawamura Memorial DIC Museum of Art, Sakura

W. 1706, HY 80.

1909年の個展出品作48点のうち、1907年の縦長の「睡蓮」は13点を占めていた。一度に公開された同一構図としては最多であり、モネのお気に入りであったことは間違いない。モネは実景に忠実に描いており、同一年制作、同一構図の作品群では、同じ花と葉の配置が繰り返されている。睡蓮の花は右上では赤、中央より少し上の一群は青みがかった白、右下も青みがかった白、左下は赤で大ぶりに描かれている。光の調子に応じて色調が調整されており、同一構図の別作品の花弁はしばしば本作よりも黄が強い。

モネは、屋外で実景を前にして、瞬間的な変化を見逃すことなく、極めて短時間に作品を完成させることのできる優れた画家、という自身のイメージを流布させようとした。だが実際にはモネが使用していた油絵具は、乾燥までに時間を要する。モネは幾層も油絵具を塗り重ねている。実景を前に屋外で描き始めたとしてもアトリエで、時間をかけて仕上げているのである。

クロード・モネ

## 睡蓮

1907年

油彩／カンヴァス

100.0×81.0cm

和泉市久保惣記念美術館蔵

Claude Monet

## *Nymphéas*

1907

Kuboso Memorial Museum of Arts, Izumi

W. 1713, HY 87.

モネは夏の開花期間中、池のほとりで日没まで制作した。空は残照の光をたたえ、夏の日中の熱を帯びたままである。だがノルマンディー地方特有の、夏の宵の冷気がすでに水面を覆い、花々は徐々に閉じ、夜に備え始めている。

1907年4月、モネは予定されていた展覧会の延期を、画商デュラン=リュエルに通告した。延期を申し入れた書簡でモネは、前年までに描いた多くの作品を破壊した、と記している。最晩年になってもモネは、制作に行き詰まり緊張が頂点に達すると、ストレスに耐えかねて突発的に作品を切り裂いた。生き延びた「睡蓮」のなかでも、1909年の展覧会の出品作は、一段と高い完成度を誇る。

本作は蒐集家アンリ・カノンヌの旧蔵品である。カノンヌは、本作と同じ構図を見せる1907年作の「睡蓮」をさらに3点、計16点の「睡蓮」を所蔵していたことがわかっている。本作は1920年代からおよそ20年間、史上最大級の「睡蓮」コレクションの一角を占めていた。

クロード・モネ

## 睡蓮

1908年

油彩／カンヴァス

101.0×90.0cm

東京富士美術館蔵

Claude Monet

## *Nymphéas*

1908

Tokyo Fuji Art Museum, Hachioji

W. 1731, HY105.

1908年に描かれた本作は、前年に制作された作品群とくらべて明暗の対比は和らぎ、パステルカラーに近い色調を持つ。モネは1908年の夏が終わると、「睡蓮」の連作の制作に一区切りをつけて、妻のアリスとともに、ヴェネツィアへと旅立つ。旅行後に、「睡蓮：水の風景連作」展の最後の準備に入った。本作も、同展出品作のひとつである。

早くも1897年に、モネは「睡蓮」で一部屋を飾る装飾画の構想を抱いていたが、一度は立ち消えている。ついで1909年の個展が装飾画の構想を深めるきっかけとなり、モネが再び装飾画の制作に意欲を見せたことが知られている。だが、翌年の1月、セーヌ川の洪水によりモネの庭は壊滅的な打撃を受けてしまう。さらに妻子の死が重なり、モネはしばらく制作から遠ざかった。本格的に制作を再開するのは1914年、以後モネは、オランジュリー美術館の睡蓮の装飾壁画のプロジェクトに、残りの生涯をかけて手を加え続けることになる。